

問題に對して大なる識認と、追従とを示して居るのであります。研究の問題としても、幼稚園教育は、今や決して小なるものではないのであります。

お互に堂々たる自重を以つて益々眞個のフレイ
ベル主義新釋を勵まなければならぬと思ひま
す。

哺乳兒の營養法(二)

醫學士 石 塚 保 吉

哺乳兒の營養法、これを易しく云ひますと、お乳の吞まし方であります。かう云ひますと、極く詰らない何でもないのであるやうに考へられますけれども、實際は非常に六ヶしい事柄でありまして、小兒科の醫者は常にこの爲めに苦心をして居るのであります。

この方法が宜しきを得て居るか否かは、直接に子供の發育の上に大いなる影響を及ぼすものであるの不當なる爲めに、消化機病を惹き起して其の子

供の一生に少なからぬ不利益を來すものであります。哺乳兒の時代に、一度消化機を害しますと、夫が度々再發致しまして非常に子供の發育を妨げるもので其影響は殆んど一生これがついて廻るものでありますから、何んでもない事のやうに思つて居るお乳の吞まし方は、極めて細心の注意を要するのであります。

營養法といふ中には、二つの區別があります。即ち(一)天然の營養法、(二)人工營養法、であり

ます。云ふまでもなく(一)は母の乳で育てる場合で、(二)は牛乳其の他の代用品で育てる場合であります。この二つを分けて、少しく御話して見やうと思ひます。

一 天然の營養法

二種の營養法の中で、天然營養法は最も自然に適つた完全な營養であることは勿論であります。何故、母の乳が最も適して居るかといひますと、大體次の三つの理由に因ると云ふことが出来やうと思ひます。

(一)、子供の方に營養品として要求するものが、其の儘に母親の乳から供給されるからであります。

(二)、母親の乳でありますと、生きた其の儘の乳を吞まることが出来るからであります。御乳は決して無生の液體ではありません、其中にはいろいろな生活力が含まれて居りますので、例へば

消化素や、アンチトキシシン即ち抗毒素といふやうなものがあつて、夫れが其の儘に子供の體內に入つて行くことが出来、従つて子供の消化が適法に行はれ、抗毒素がある爲めに傳染病や、其の他の病に抵抗することが出来るからであります。

(三)、母の乳は乳房から直ぐに子供の口へ入りますから、消化機病の原因となるべき黴菌がつかない。従つて消化機病に罹る場合が、それだけ少い譯であります。

其の他、實際に於きましても、母親の乳で養はれた子供は、人工營養によつて育てられた子供に比して、發育も營養も非常に勝れて居て、病氣に罹る事が少く、病氣に罹つた場合にも、人工營養兒に比して抵抗力が強く、死亡の比も少く、また、病の治るのも早いといふ事は、事實の示す處であります。かやうに理論の上にも、實際の上には、母乳は子供の營養品として最もよいものであります。

すから、第一にこれを與へなければならぬのであります。然し前にも申したやうに、其の與へ方が不當である場合には、種々な弊を醸して來るのは勿論であります、一般に母親の乳だと云ふと安心して、何の考へもなく欲するまゝに與へて置くといふ場合が多いのであります。併し母乳と雖、何時も完全のものとは云はれません、時として夫れを療さねばならぬ場合があります、例へば、母親に脚氣のあるとき其乳を飲まして居りますと、乳兒脚氣と云ふ恐ろしい病氣に罹り、生命を失ふ事も往々あります、又母親の肺結核であるのに乳を飲まして置きますと子供に結核を傳染するのみならず母親の體が段々衰弱を増して參ります、其他母の乳房に病がある時、乳首が小さくて吸付く事が出來ぬ場合、御乳の分量が少なくて子供を養ふに足らぬ時、母親が熱病に罹りたる場合などには、乳を與ふる事は出來ません、母親が梅毒の時には、

却て其子に御乳を與へた方が宜しいのであります。此場合には母親の乳の中には自然的に梅毒を消す力が備はつて居りまして、一種の血精療法を行ふ様のものですから必らず與へなされてならぬのです。

これ等の特別の場合を除きましたは是非共母乳營養を行はなければならぬのであります、又御乳の出様が少ないからと云ふて全然母乳を廢する事は能くない事で、其場合には混合營養と申しまして母乳を與ふる傍らに牛乳を以てそれを補ふて行く方法をとらなければなりません、此方法は勿論天然營養には劣りますけれども、純粹な人工營養に比べると、遙かに優つて居ります、

母乳營養を行ふに就て注意すべき事柄は先づ御乳の出方と子供の大きさを考へ合せて大凡の分量を定めて置く事です、如何に善良なる御乳でも其量を過しますと必らず消化不良を起すものですか

ら、前號に御話した胃の内容を参考して、飲過し
のない様に御注意を望ましいのです、御乳の出方
を計るのは一寸困難でありますから大凡の量を一
度充分に張つたとき搾つて見ても分りますし哺乳
の前後に御子様を計つて見ても分ります。

第二は時間を一定する事です、これも分量と同
じく甚だ大切な事で、哺乳と哺乳の間に適當の
間隔を置かなければならぬのです、夫れには前號
に御話した消化の時間を参考して二時間半以上三
時間とするが適當と思ひますか、斯様致しますと
胃の中で舊い乳と新たらしき乳と混合して消化不
良の原因となる様の事があります。

第三は回数で分りますか、之れも初めは分量が
少ないから八回位、月數が経つに従つて七回六回
と減じて參りまして五六ヶ月の比から五回と致し
ます。

第四は乳頭を清潔にする事です、母乳は前にも

申上げた様に黴菌を含んで居るのですが乳頭を不
潔にして置きますと其から黴菌が子供の胃腸に入
り消化不良症、のみならず腸胃加答兒を起します
其故哺乳の後には必ず五十倍位の硼酸水にて拭
ひ哺乳の前には更らに湯さましてにて拭はれる事が
必要です。

第五は母親の食物であります母親の食物が、子
供の影響を及すと云ふ事は古來認められて居る事
實でありますか、哺乳時にて深く此點に注意せな
ければならぬのです。先づ避けなければならぬも
のは青物類ですそれは多くの場合子供に消化不良
を起します其他香料、介類、蟹、酒類等です、其
他藥類も可成飲まぬが宜しいです殊に阿片、ロー
トエキス、蘆薈、センナ、臭素、沃度、水銀、砒
素などは御乳の中に出て參りますから氣を付けな
ければなりません。

次には御乳を口に付けて居る時間ですが、子供

の吸ひ方、御乳の出方にも依りますが、大約十五分間位で十分であります。

二 離乳

子供がだん／＼發育して來ますると、天然營養を止めなければならぬ時機が來ます。これを離乳と云ふのです。離乳の時機に就いては、いろいろの説があつて、一定して居りませんが、自分の考へによりますと、齒の生へる時機、即ち生齒を以つて、離乳の標準にする方が一番便宜かと思ふのであります。何故なれば、生齒は發育の状態を最もよく代表して居るからであります。生後八ヶ月か十ヶ月位の間に前齒が五六本生へて來ますから其の時機が一番適當であるのです。たゞ茲に注意すべきことは、生齒の時機が此の頃のやうに初夏の候でありましたならば、其の年の秋まで離乳を延ばして置くことが必要であります。初夏の候は最も消化機病に罹り易い時節だからであります。

乳を離すに當つても、急劇に離しては可けないので、次第／＼に離すやうにせなければならぬのであります。初め、母乳から牛乳に變へるときも、母乳を一度ぬいで、其の代りに牛乳を與へる、これを二三日續けた後に二度牛乳を入れて、一度母乳を減じて行くといふ風にして、先づ牛乳に變へて置いて、次第に、おも湯やおかゆに變へて行くといふやうにすることが大切であります。

若し、さういふ變へ方の出來ない場合、例へば子供が母乳の片手に他の物を食べない、牛乳や其の他の營養物を絶對にとらないやうな子供の場合には、致方ありませんから、急劇に變化させる。或は母乳に何か辛味をつけて離すとかいふやうな方法をとつて、是非牛乳に變へなければならぬのであります。

三 乳母の乳を與へる場合

母乳に次ぐ第二の營養品としては、乳母の營養

法であります。然し乳母を頼むに就いては、餘程注意をしませんと、反つて不都合が起ることが多いのであります。故に乳母の撰擇が、先づ大切であります。乳母としての必要な條件を二三掲げて見ますと、

第一、非常な健康體であること、殊に結核、梅毒、皮膚病等の病氣があつてはならぬこと、

第二、乳の出方が十分でなければならぬこと、これを見るには、試みに其の乳母を置いて、廿分間位お乳をすはしめて、子供がそれで満足して、眠るやうでしたらば、それで相當と見なければならぬのであります。

第三、乳母の出産をした時と、子供の出生した時とが、成るべく近いのが最もよいのであります。然し、そんな者は容易に得られないものでありますから、大體、分娩後六週間か八週間位経過した者を求めるやうにすることでありませう。又餘

り遅いのも宜しくありません。

第四、年齢は廿代位で、二度目の御産ならば最もよろしいので、初めての御産であれば、乳が上る恐れがあるし、それ以上であると乳が少くなるからであります。

第五、乳母に雇はれやうとする人は、中々眞當の事を云はないもので、いろいろの偽を云つて、どうにかして雇はれやうとするものでありますから、一番安全なのは、醫者に検査して貰ふことでありませう。もつと簡單な方法は、乳母が現在育つて、居る子供の状態を見ることが一番よいのであります。

これ等の條件が具つて居ると思はれた場合には試みに二三日御乳を與へさして見た上に定めるやうにした方が安全であります。病氣などは醫者でなければ明らないものでありますから、さういふ恐れのある場合は醫者に検査を頼むことが必要であります。